

Yellow&Black Rabbit 設定

世界とは

ワールドは階層的に存在。

また、階層はやりわり存在しているだけで入れ替わることもある。ワールド間の衝突が起こることがあり、その際にはワールドに穴が開くこともある。

ワールド区分：世界の見方。

例) ワールド A-106(4)-Ⅲ・FA

→「ワールド A」

大まかな世界線の違い。犬、人間・・・などの大きな変化毎の区分。そもそも『世界』が異なることが多い。そもそもの法則などの違いとか。

→「106(4)」

もう少し細かい区分。「106」はその世界で何が発展してるかとか大きなターニングポイント毎の違い。錬金術の世界と科学の世界みたいな感じ。(4) はオリジン・創造者などによる関与の仕方。

→「Ⅲ・FA」

『キーキャラ』の指定。その後の「FA」はキーキャラの行動による分岐。

(どうせ分からなくなるからメモ 1 = I 2 = II 3 = III 4 = IV 5 = V 6 = VI
7 = VII 8 = VIII 9 = IX 10 = X)

キーキャラが同世界線に二人以上いる場合もある。

本当はもっと細かく分岐している。永遠に分岐していくためすべてに名称をつけることは不可能。

「生まれつき」紫の眼、緑の眼、アルビノ etc・・・など

遺伝子的なのはどのワールドにおいてもワールド 0 と同じ割合で生まれる。魔力やら気やらの影響は遺伝子的なものに含まない。

ワールド 0

ワールドは階層的に存在している。ワールド 0 はワールドの頂点に存在。

全てのワールドの根幹であり、ワールド 0 は他のワールドから大きく隔離されているうえに保護がかかってる。ワールド 0 への移動は抜きん出て難しい。

ワールド A

ワールド 0 と法則・地図・歴史などが変わらない。ワールド A と 0 との違いは近代の人の生まれなど。A にいない人物が 0 にいたり 0 にいない人物が A にいたり。文化なども違う。ワールド 0 の写しのようなものでワールド 0 と同時に進行。

ハザマ

複数存在する世界線の間、狭間に存在する世界。ワールドの欠片の集合。いつからそこにあったのかは誰も知らない。

ハザマもまた複数存在する。

世界の IF と世界の断片をかき集めた世界。無限に続くともされる。

無機的なものだけではなく生物も狭間に堕ちることがあり、堕ちた生物は堕ちる前から変化する。性格的に感情的に身体的に少しずつ変化する。

狭間に堕ちた者の中には己が死んだ記憶を持つ者がおり、本当に死んでから狭間に堕ちたのかそういう記憶を塑像してしまっているのかは不明。もしくは皆一度死んでおり、それを忘れる人がいるというだけなのかもしれない。

無限の世界と多様な生命・文化、etc・・・

ワールド間の移動

かなりのエネルギーを必要とする。普通の人間にはまず無理。

遠くのワールドへ移動するほど多くのエネルギーを必要とし、ワールド 0 への移動は抜кин出で難しい。

オリジン＝私

最も神に近いが神ではない。オリジンはオリジンであり「創造者」たちはオリジンに振り回される側のもの。『神とは何か』『生死とは何か』答えのない問いへの様々な回答を享受している。「こうしたら面白いんじゃない？」と介入することがあり「創造者」たちからしてみれば非常に迷惑な存在。コピーからは嫌われることが多い。

全ての世界線、狭間を観察している。

見ているだけだけど展開・システム・制限、全てコイツによる。

コピー＝作品内の私

オリジンと同じ記憶を持っているが性格などは偏りが生じている。外見の変化なども相まって完全に別人。だけど同一。物事の展開全てが origin の思い通りだと思うと腹立たしい。その感情すらも origin の手のひらの上であるため「クソが」としか言えない。

Origin・コピー

生命の創造能力はない。狭間の生命たちもどこかのワールドにいた生命。外見は似た種族でも「中身」がかなり違うということがよくある。

創造者 クロコ 灰狗 しらぬき

神ではない。ワールドへの干渉、窓の創造などが可能。研究者たちに接触。

クロコ

創造者かつ想像者。コピーは各ワールドにいたりいなかったり。また、コピーはオリジンが望まなければ死ぬことは無く、最強ともされている。すべては「オリジン」の手のひらの上。ただ創造能力（「窓」の作成）だけは絶対に与えられることは無い。

「Yellow&Black Rabbit」における「世界」

ワールドとして確立していない『狭間』の一つが舞台になっている。

「Yellow&Black Rabbit」の『狭間』には、あったかもしれない『IF』や『可能性』が紛れ込んでいることも。また、他のワールド内での考え方や常識などがゆがんで伝わってしまっている場合がある。

他のワールドよりかなり遠くにあるワールドであるためか時間の経過が他のワールドとは異なるようだ。また、他のワールドから来た生物は元のワールドの時間の経過に基づいて老化するようだ。

世界の果て

「Yellow&Black Rabbit」の「世界」には「果て」がある。

世界は少しずつ崩壊しており、崩壊したところは「I」のように「バグ」が起きていたり、MSのように真っ黒な何かに浸食されたかのようになっていたりする。

世界の果てに住む者はいない。

世界の果てに堕ちてしまえば二度と戻っては来られないだろう。

二人称

「Yellow&Black Rabbit」の「世界」は二人称が「彼」で統一されている。

対象が男性であろうと女性であろうと「彼」で呼ぶ。

これはハザマが確立した直後のこと（アンがアンであったころのこと）が影響している。生物の性差（特に脳の性）は非常にあいまいで、彼・彼女と区別することは難しいため、「意識」「思考」を重視していた「アン」及びそれから生まれた「天使」にとって、男女の区別

は必要のないものであったためである。

一応、男・女の区別はあった。この区別は肉体の構造の違いを重視した区別である。

それにも関わらず、物語の舞台となる時代に性別を重視する街が存在しているのは、「天使」が「墮天使」となるにあたり「人間」と融合していることと、時代が進むにつれて他世界の人間・生物が流入したことが影響している。

・「墮天使」になった彼ら（天使ら）の最終意思決定（思考の主導権）は、基本的に宿主となる人間に託されるため、その人物が性別を重視しているのなら「墮天使」となった彼らは性別を重視するようになる。（「天使」としての人格はその限りではない）

・他世界の人間、生物が流入する際、記憶を保ったままワールドへ来るものがある。彼らはワールドに染まるものもいるし染まらないものもいる。性別を重視しているものがワールドに墜落し、ワールドの中でもその考えを貫き、その考えを持つもの・その考えに染まるものが集まるならば、その地域で生まれた子供は性別を重視するようになる。子供を産み、大人になり、また子供を産み……。そうして徐々に地域を広げていくと街になることもあるだろう。

神とは

この世界においては偶像崇拜を主体とした神が君臨する。

聖なる面を神と呼び、悪しき面を悪魔と呼ぶ。肉体を持たない。

神は善であり悪である。悪魔は善であり悪である。

神＝悪魔＝基盤＝天使

↳ 墮天使（人と融合）

「神は信仰するから存在するのである。」

それは人の見る幻想か、真実か。

それを知るのは、ただ。

神のみである。

生物の信仰の集合が神である。

「神」という絵、像、を通してエネルギーを受け取っている。

「天使」が生まれたのは世界の存続のためだとか生物のためだとか、そんな崇高な理由があったからではない。

ただ自責と逃避の末、生まれたのである。

宿主

「天使」が選り、未発達の世界線へと集める。

「天使」は人格を内包しており各世界線からの「候補者」のなかで自身の「心」と親和性の高いものを宿主として選抜している。

ロゴス（言葉）

神の力を介するもの。非常に強力。神を神たらしめる力。

ロゴスは無形であり何にでも変化できる。

神の言葉は神の力と共に垂らされる。

他のワールドから集められているはずなのになぜか言葉が通じ合う

→ワールドを移動するときに「強制力」が自動で働いているため。この『ハザマ』には完成したバベルの塔（中枢管理塔）が存在する。バベルの塔があったもしもの世界。

「意識」とは

上位存在、高エネルギー生命体。「言葉」を知るまでは「自我」が確立せず、ふわふわと世界の間を漂っていた。

己を明確化してくれた「言葉」に一種の敬意を抱いており、「言葉によって私は生まれた」と思っている。

ある人間に出会い「アン」となり、その人間により「アン」は自らを壊した。

天使とは

アンから分離した「意識」のこと。

人間と融合する前までは「天使」であり「神の一要素」である。

「天使」らは互いに興味がないため名前などを聞きあったりはしないが、自ら公開している者がおりその「天使」の名前は把握されていたりする。

「天使は神によって創造され、神の命に従う。知恵・知識・力はすべて神から与えられた。神を絶えず褒めたたえる」

それは本当か、否か。

神が善であり悪であるのならば、天使もまた、善であり悪である。

「天使」は発言・思考をする「エネルギー生命体」である。彼らは物質的な体をもたない。身体のように見えるそれらは物質を自前のエネルギーでつなぎ合わせただけの「仮の体」で

ある。(故に彼らの体は表面上の物質分の重量しかなく、非常に軽い。風船などに近い)
「宿主」との融合の際には「仮の体」を捨てエネルギー体(意識)に戻っている。

彼らの思考はいわばエネルギーの弾け方、流れ方などにより構成されている。また、彼らは己のエネルギーを自在に操ることができる。

ゆえに彼らは思考を担うエネルギーの流れを均一にすることで「ただのエネルギー」になることができる。その場合、彼らは「自我」を完全に失い再生は不可能になる。「思考を放棄する」あるいは「自死する」ともいえるだろう。

信仰が届かなくなると神は消え失せる、とあるがそれは天使も然り。天使は「^{アツ}神」として累積していたエネルギーを用いて存在していた。「天使」はエネルギーを得るための口のようなものをもたない。「口」であったアンから切り離されたためである。しかし存在するだけでもエネルギーは消費されるため、早々に宿主を決め、エネルギーを得るための口を獲得する必要がある。

(信仰というか、その天使に適したエネルギーが必要。食事のようなもの。「Yellow&Black Rabbit」における天使・墮天使は各々に適したエネルギーを得るために宗教をやったり街を統治したりしている(してない奴もいる))

変幻自在なため人間の姿にもなれる。

各々摂取可能な EE・不可能な EE があるらしい。

暴食・色欲・強欲・嫉妬・憂鬱・怠惰・虚飾・傲慢・憤怒・無欲・知識欲 (残滓)

神から分離していった順は

暴食→嫉妬→傲慢→強欲→色欲→虚飾→憂鬱→憤怒→怠惰→知識欲→無欲 の分離

暴食 『勧告』

彼は子供のように純粋である。

食べることが大好き。

宿主のことは特になにも思っていない。

『トマトウル』が取り戻したいのは自分の一部である「おとうと」

『暴食』が欲しいものは「」

『それ、いいなー！僕にもちょうだい！』

『おとうと？へえー？』

『あ！良いこと思いついたー！』

『いっぱい食べて、いっぱい寝たら「おとうと」も戻ってくるんじゃない？』

『だって、膝をすりむいても、指を切っちゃっても、いっぱい食べていっぱい寝たら治るじゃん！』

『だから切られちゃった「おとうと」もきっと、いっぱい食べていっぱい寝たら治って戻ってくるよ！』

『多分、今まで「おとうと」が返ってこなかったのは食べる量が足りなかったからだよ！』

『僕は「暴食」』

『僕がいっぱい食べる手伝いしてあげる！』

色欲 『』

彼は全ての生物を『愛して』いる。相手に何をされようとも彼は相手を、全ての生物を『愛』し『愛』し続ける。

彼の行動は全て相手を愛しているが故の行為であり、そこに敵意は絶対に持ち合わせない。すべての生物を愛しているが故に、彼は誰の味方であり誰からも敵意を抱かれる。

すべての天使、アンまでも、同様に『愛して』いる。

言ってしまうとオカンの存在。

宿主のことは娘のように思っている。

『アンタ、アタシが見てきた中で誰よりもあわれだね』

『やめておけばよかったのさ。あんな男はアタシぐらいじゃないと愛してあげられない』

『人間の感情は人間には大きすぎるって決まってるから——ああ、アンタの世界じゃ可視化されないから分かんないか』

『うん、だけどアンタ「良い」ね』

『アタシが見てきた中で誰よりも「良い」女だ』

『アタシは『色欲』』

『アンタ——アタシと一緒に来るかい？』

強欲 『赦し』

基本は堅い口調だが、本来の彼はフランクな話し方をする。しかし、何を考えてそう思ったのか、なぜそうなるのか、といったことを相手に伝える気がない言葉選びをするため、彼との会話は時折困難を極める。

アンバーが本当に欲しがっているものを知りながら、彼を宿主に選んだ。

『芯もなく、むやみに欲しがるだけじゃ空虚だ。本当の欲とは言えない』とは、彼の言葉。

アンバーのことは友人のような、先輩後輩で言う後輩のように思っている。

『アンバー』も『強欲』も、本当に欲しいものは「愛」「絆」といった、形のないものである。

アンバーははっきりとは自覚していない。

強欲はその自覚があるが、それを得るための方法が分からない。

『お前が欲しい』

『私は『強欲』。かつて神だった物』

『私には見えたぞ。お前の心の奥底が』

『与えられても満足せず、更に更にと貪るその心意気』

『私になるに相応しい』

『与えようぞ、その力。あらゆるすべてをなぎ倒し、お前はいずれ、すべてを得るであろう』

嫉妬 『憐れみ』

ぽつぽつと話す。

すべてのものを欲しがり、手に入れたら大切に保管し続ける。それを持っていることを忘れることが多い。

宿主のことは協力者のように思っている。

『ソフィア』が欲しいものは「賞賛」だが、自覚は無い。

『嫉妬』が欲しいものは「」

『いいなあ』

『いいなあ』

『取引、しませんか』

『わたし、人間になりたいの』

『代わりにあなたを唯一の存在にしてあげる』

『なんでも手に入れられるような、手伝いをしてあげる』

『わたしは「嫉妬」』

『あなたとなら、望むままに生きていけると思うんです』

憂鬱 『自責』

宿主の腹の底で渦巻いている感情を気に入り、死ぬのを待ってからさらった。急にさらわなかっただけ優しいやつ。

『オリヴァー』が欲しいものは「娘」「孫」。消して手には戻らない、かつての幸福な時間。

『憂鬱』が欲しいものはただ「幸福」。シンプルだが、本人すら「己が何を幸福だと思うのか」ということを認識していないため非常に入手しにくい。

『鬱々としているな』

『自分の行動を後悔しているのか』

『いや——そうか』

『良い、感情だ』

『お前、俺と共に来い』

『そうか。だが俺は、何があろうとお前を連れて行く。拒否などできないと、よく覚えておけ』

『それではまた。俺はお前を迎えに来るぞ』

『俺を覚えているか』

『ほんの少し目を離していただけなのに、随分衰えたな』

『ああ、眠るがいい。次に目を覚ました時には、別の世界だ』

『俺の名は「憂鬱」』

『死神なんてものではないが——それに近いものである』

怠惰 『享楽』

比較的丁寧な口調だが、態度はそこまで良くない。

ゆるーくのんびりした性格に見えるが、頭の中では様々なことを考えている。

面白いことが大好き。「面白いこと」のためなら不利益を被ってもあまり気にしない。

宿主のことは悪だくみ仲間のように思っている。

『んー・・・ま、アナタでいいか』

『僕は「怠惰」』

『アナタ、僕と一緒においでよ。一番面白そうだし』

『理由ね・・・それが、役目らしいからねえ。まあでも、僕からは別に、アナタに求めることは無いし・・・アナタはやりたいことだけやっていればいい』

『力さえあれば、大抵のことはできるだろう。僕が力を貸してあげる』

『ははは。うん。アナタ、僕と馬が合いそうだね』

『それじゃ、これからよろしく』

虚飾 『嘘』

宿主とは言っても融合はしておらず、寄生に近い。純粹、無知、不安定だからこそその嘘。自らによる『嘘』、『でまかせ』、『虚構』が彼を構成している。嘘でまみれた彼は嘘で飾られ、

『そうだった』気になっているだけで『そうなって』はいない。自らがついた嘘を本当のことのように思いこむ。それが嘘であったということすら忘れ、本質を見失い己が何者であるかも忘れてしまった。

すでに持っている者がうらやましい。だがその感情と向き合わず自らをも誤魔化し、得た気になって満足しているから何も得ることは無い。

天使としての姿は何か四肢がわかる、なんとか人であると推察できる程度の形であり未完成。他の天使との意思疎通すらままならない。

傲慢 『糾弾』

宿主を見下しており真の意味で認めているとは言い難い。宿主とは一線引いており、融合まではしていない。(宿主はそのことを知らないようだ) 自身が神の一部であったことを誇りに思っており神への忠誠というよりは己への忠誠に近い。他の天使を見下している節があり、神の核心であったもの(アン)以外には表面上を取り繕って(猫をかぶって)接している。容姿は神が作り上げたもの。

神の消失ののち、まるで己が神であるかのように思っている。(もとは神であったため間違いではない)

『ごきげんよう、選ばれしお方』

『わたくしは『傲慢』。天使、あるいは悪魔と呼称される、あなた方より高次の存在です』

『主の命に従い、わたくしはあなた様に『わたくし自身を』授けに参りました』

『翼を欲しますか？ならば授けましょう。光輪を欲しますか？ならば授けましょう。他の望みはありますか？あなたの欲するものはすべて、わたくしが授けましょう』

『あなたはわたくしに^神選ばれたのですから』

憤怒 『咎め』

「憤怒」として波長の合う「宿主」を見つけることができず欠番になっていた。

そこをアヴィがふざけ半分で宇佐とつなげたが、そのまま定着。アヴィが繋げているため多少はアヴィの介入(精神的にも固有身体能力的にも)を受ける。

→宇佐と「憤怒」は波長が合っている。

→最後、クロの完全分離により抵抗力の低下した宇佐美の意識を奪い取ろうとした。このとき「憤怒」は融合では無く「受肉」をしようとした。そのためこれが成功した場合「憤怒」はロゴスの権能を振るえる。

宇佐美が理性を忘れて怒り狂えば、クロがいたとしても憤怒の手中に落ちていただろう。

そもそも宿主を認めていない。自身で選んだものではないし融合してやる気はない。宇佐

美の怒りごと全て飲み下し、自身の一部にしてやろうと考えていた。宇佐美とクロが融合する前に体を奪い、アンの意思に反して世界を混沌へ導く『墮天使』を全員殺そうとしていた。宇佐美の理性は鬱陶しい。怒りの感情は気に入っている。

宇佐美の体を奪おうにもクロがいて入り込めず、「墮天使」となった「人間」そして世界の生命を見て「神（アン）への忠誠は失われた。存続するに能わない」と判断。

アンのため、裁きを執行する。

アンのことを一番に考えている。本来慈悲深い性格のはずだが、アンを想い、世界を想う故に怒りを抱いている。

容姿は神が作り上げたもの。

神の消失ののち、自分の親でもある「神」の意思を尊重するため宿主を探すも、適したものがこの世界にいなかった。

世界線を越えた存在である宇佐美を吸収しようとするも完全に吸収する前に繋がりを切られ、宇佐美自身で元の世界線に帰られてしまい失敗に終わる。（というのが終わらせ方の一つの案）

『・・・愚かなり、かつての同胞よ。慧眼を失い神への忠誠をも忘れたか。
試みることもなく俗世を享受し、人に堕ちた、愚か者が・・・貴様が『私』を壊すと宣うか！』
『貴様に名乗る意味などない。その身体を捧げよ』
『「アン」が望んだのはこのような世界ではない。もはやこれらの生命は試すに値しない』
『これより、裁きの時間である』

無欲 『肯定』

知識欲 『探求』

神としてのロゴスの気質が残っており、分類などの「文字」に執着していた。
→本当の名を隠す文化の浸透。

情報は錯綜する。人が情報をつたえるとき、必ず「ズレ」が生じる。
物事を情報として落とし込むとき。情報を発信するとき。そしてその情報を受信するとき。
わずかに、しかし確かに「ズレ」が生じる。
それが蓄積し、情報はねじれ、分かれ、ゆがんでいく。
間違っていないが正しくもない情報。

アンがああなったのも、それが原因だった。アンは情報に殺された。
だから少しでも正しい情報を、出来る限り集めて記録しよう。

もう遅いことかもしれないけれど、私は「記録」を始めよう。
アンが望んだ、世界を作るために。

そして次第に協力者が現れる。

「正しい情報」によって救われた者。「正しい情報」を追い求める者。「ズレた情報」によって失った者。

彼は彼らを受け入れた。

生命による記録は、必ず「ズレ」を生む。

それを承知の上で、受け入れた。

一機体^{ひとり}では見ることはできなかった所を補うために。一つでも多くの「記録」を作るために。

「完璧な記録」を、完成させるために。

そして、いつか。

全てを知り、全てを正しく見て、全てを救う「神」を降臨させるのだ。

(残滓)

墮天使とは

「人間」と「基盤」が融合した物。

墮天使となった時、「天使」の人格は「宿主」の人格と融合し一つになる。ふとした瞬間に「偏る」がその自覚がある場合とない場合がある。

墮天使となると融合した天使の性格が混ざるため人間性が失われることも多々ある。

宿主と融合した際「神の権能」は変化し「無（ロゴス）」は形を持つ。「神」は「墮ちる」。

宿主は天使と融合することで世界線の一部となり「権能」を扱えるようになる。

「天使」の体は消え、基盤は「宿主」へ接合する。

墮天使の肉体は「人間」であり、生きるには「人間」が生きるのに必要とするものを必要とする。死んでも「宿主」の肉体が残る。

『墮天使』を殺すには

「宿主」と「天使」の精神（意識の根幹）が保存されている核を壊す

のが、もっとも単純な殺し方。
他にも方法はあるが列挙しない。

『墮天使』になる前に候補たちで集まってどこを統治するのかとか決めた。
話し合いは何度か行われているため、彼らは全員顔見知りである。
また、話し合いを行っているのは生命のいない他のハザマであり、何をやらかしても影響はない。

翼

【旧案】

【今の案】

墮天使として生き、動くためのエネルギーを蓄積するタンクのようなもの。
この翼が無ければ彼らはエネルギー不足により固有身体能力を行使することができない。
「墮天使」である彼らだけが翼を必要としている理由は、「墮天使」としての能力を行使するために必要なエネルギーが非常に大きい故にそのままの体の構造では能力の格子が不可能なためである。

光輪

【旧案】

【今の案】

『墮天使』たちに欠かせない感情エネルギー（EE）を得るためのアンテナのようなもの。
決まった「波長」のようなものがあるらしく、個体によって摂取可能な EE と不可能な EE がある。
わざわざ環状にしているのはとある「天使」からの提案があったためである。

墮天使の固有身体能力

墮天使の固有身体能力は正しくは「権能」と呼んだ方が適している。「身体能力」の域を出ており、個人の持つ EE だけでなく信仰を通して得た EE も使用している。

Core 核

【旧案】

【今の案】

天使と宿主の精神が宿る『本体』。身体とつながっている。
これが壊れるまでは生き続けることができる代わりに、これが壊れると死んでしまう。
Core は人間の力で破壊が可能。
事故で破壊されたりしては敵わない、と考える者が多く、大抵は自身の管理下に置くことが

多い。

またこれが身近にあった方が肉体と意識のつながりが強くなり、本領を発揮しやすくなる。

『名』とは

【旧案】

【今の案】

個体差はあれども、天使たちは『アン』であったころの名残で「名付け」「名前」を大切なものだと考えている。

墮天使となった後もその性質を受け継いでいるようだ。

アン由来の性質だからか、天使たちは名付けの仕方が似通っている。

信仰とは

信仰が届かなくなると神は消え失せる、とあるが天使もそう。天使が消えると「墮天使」ではいられない。それまで扱えていた「権能」も使えない最初の状態（もとの世界線上での肉体）に戻る。

肉体に傷がついた場合は基盤により、エネルギーを用いた治癒が勝手に行われる。つまり基盤でなくなった場合は肉体の治癒が不可能になる。

宿主

暴食：アバドン （遺骨の入ったペンダント）

ワールド A-191(4)- I のうちワールド A-191(4)- I -AA より選出。

10歳もいかない少年。

偽名として「トマトウル」と名乗る。

出身は不明。

母が嫌い。父が嫌い。「おとうと」を殺されたから嫌い。

きらいきらいきらいきらいきらいきらいきらい

「おとうと」を助けてくれなかったみんながきらい。

物事の善悪があまりよく分かっていないようだ。恐らくではあるが、何かしらの障害を持っている可能性がある。

固有身体能力：食べた分だけ質量が増えるようだ。増えた質量を切り離すことで分体を作ることができるようだ。

翼：昆虫の羽のようなもの。恐らくバッタ（サバクトビバッタ）の羽と同じようなものだろう。

光輪：肉片のようなものが集まったもの。

結合双生児だった。ただ、「おとうと」の脳は未発達で成長の見込みはなかった。

そのため手術により切除することが決まっていたが、トマトウルはその意味を理解できず手術後に号泣。

色欲：オビズート （エコー写真）無理心中

ワールド A-59(3)- I のうちワールド A-59(3)- I -A より選出。

高身長（175cm）。アッシュブロンドの髪。青い虹彩。

偽名として「フリンドラ（VLINDER）」（オランダ語で『蝶』）と名乗る。

自称オランダ出身。（ゲルマン系？）世界線上ではオランダ語と英語を話す。

固有身体能力：一度でも「接触」した者の行動を操る。思考は操れないが靄がかかったように曖昧になるようだ。接触の度合いで操れる強さが異なるようだ。

翼：皮膜でできている。恐らく蝙蝠の翼と同じようなものだろう。

光輪：赤い、非常に粘度の高い輪。

子供を孕んだのちにパートナーと離婚。仲が冷え切り、それでも結婚したままだった両親に挟まれて成長したため、自分の子供にはそんな思いをさせられないと考えた。

共同親権ではあったがパートナー側はDV・アルコールなどの問題が多く、自分だけでも子供のために。と考えて働き始めた。しかし妊娠中の受動喫煙や働き過ぎが原因で流産。

流産のショックで働く意欲が消え、しばらくは貯金と借金で暮らしていた。

しばらくしてから金が底をつき、涙も枯れた。

「それでも、生きなければならないの」

そうして彼女は窓を飾るようになった。

飾り窓での仕事は慣れてしまえば苦痛も感じなくなった。

客は一瞬だけでも彼女を愛し、彼女もまたそんな彼らを愛した。

「彼らは愛してくれる。彼らの愛で私は生きている。だから私も彼らを愛するの」

まあそんなことをしていたらヤバい奴らも来る。同じ飾り窓で働いていた子に危ないからやめておけと言われていた客もとっていた。

彼女の最期は、そんな客との無理心中である。

過去のことを聞かれると微笑んで話を逸らす。少しだけ話してくれることもあるが、流産については話せない。

恋は自分中心の感情のため「好きな人に好かれたい。自分が幸せになりたい」というような感情が含まれているらしい。

愛には以下四つの種類があるらしい。

- ・エロス 恋愛 求める愛
- ・フィリア 友愛 同等の愛
- ・ストルゲー 家族愛 血縁に基づいた強い愛情
- ・アガペー 神の愛 与える愛 無償の愛

「愛」についての考え

色々な形があるのは分かっている。

オビズートは四つの愛を以下のように認識している。

- ・恋愛 好きな相手への性愛。特に性行為につながるような愛。轟々と燃える熱い感情。絡みつき、焼き尽くしてしまうのではないかというほどの熱く激しい感情。それが一夜のものであったとしても、その時だけは彼らだけの世界がある。
- ・友愛 相手を己と同じ立ち位置の者として見、与え与えられる愛。時には強く結びつき、しかし時には非常に不安定なもの。
- ・家族愛 忘れてしまった。
- ・無償の愛 いつか与えられていたはずのもの。だが、もう思い出せない。ただとても、すてきなもの。

オビズートは最も強い愛を性愛であると考えている。ずっと続く愛なんてものは無いと考えているが故に、ごく短い間でも確かにあると思える性愛を信じている。

オビズートの考える「エロス」は合意の上であるということが大前提になっている。拒絶された上での行為、強姦などは彼の信念に反するものであるがゆえに断じて許さない。

オビズートは男女の区別なく愛を与える。求められれば与える。求められなくても与える。拒絶されたら一度はとどまるものの、じわじわと心を開かせる。

子供だけは絶対に殺さない。害さない。ただ、アバドンが殺された時だけは、これを破った。

いつものメンツで言うなら「アイン・宇佐・セイラ」あたりがオビズートにとっての「子供」

強欲：メフィストフェレス（母のくれた十字架）

ワールド A-106(4)-IIIのうちワールド A-106(4)-III-FA より選出。

黒髪。ハーフであり、生まれつきアンバーの虹彩を持つ。

偽名を考えるのが面倒で好きに呼べと言っていたが、オルニアスが「目がアンバーの珍しい人」と連呼したため「アンバー」と呼ばせるようになり、それが定着した。

自称日本出身。（アジア系とラテン系のハーフ？）世界線上では日本語と英語少々を話す。

固有身体能力：非常に小さな粒子状の黒い物質を操る。その密度や粘度を調整することで粘性を持ったり霧状にしたりできるようだ。金属や木材を侵蝕することもあるが、原理は不明。侵蝕した物質の質量分、黒い粒子が増えるようだ。侵蝕できる量には限界があるらしい。天使曰く、質量を持った闇を扱っている、らしい。

重く、遅く、息苦しい。「切る」というよりは「押しつぶす」に近い。

翼：黒い不定形のなにか。粘性など変幻自在なため翼のような形をとることはできるようなが、本人が飛行することに関心がなく、努力をすることは無いため飛行できたことは無い。もしも本人が飛ぶたいと思えば努力すれば違ったかもしれない。

光輪：黒いもやのような不定形のもの。

母は海外に行ったときに一日だけ関係を持った男性の子供を孕んでしまった。情緒的ネグレクトを受けるとともに強制的に教会に連れていかれるようになった。

その教会でその世界線の「アブディエル」とであうが、すぐに相いれない存在であると認識。以降犬猿の仲。

過去のことを聞かれると普通に答える。

いつも笑顔。真顔と笑顔しかないのではとすら思える。

基本の行動原理は「そうしたいから」で、その必要があるからやらないといけない、という時には非常に無気力。

頭の切れる天才型。流れるように嘘をつく。

不快ならごり押してでも罠にかけてでも原因を潰しに行く。怒らせたら間違いなく厄介。

宇佐美のことは気に入っているようだが、対立するようならば彼にも牙をむくだろう。

食にあまり興味がなく、墮天使となってからは感情エネルギー（EE）を消費して体を保っていた。まれに食べたくなったものを食べる程度。それでも十分な強さを保ていられるほど、彼が摂取可能な EE は多かった。

弱者にも力はある強者にも弱点がある。

最善や最悪なんてものがあるわけない。俺はどちらでも気にしない。

嫉妬：オルニアス （手鏡）溺死

ワールド A-110(2)-X のうちワールド A-110(2)-X-BD より選出。

赤みがかった茶髪。虹彩は緑色。そばかすがあり、コンプレックスに思っている。

偽名として「ソフィア」「ルドヴィカ」「エレオノーラ」と、時期によってさまざまな名を名乗っていた。この名前は自分の名前よりも他の人の名前の方が気に入ったため名乗った。

自称イタリア出身。（ケルト系？）世界線上ではイタリア語を話す。他の言語は分からない。

固有身体能力：触れた水を操る。水蒸気なども操れるため、天候を操ることも不可能ではない。アビージティブとは異なり、流れそのものを操ることができるようだ。

翼：翼というよりは何かのひれのような形をしている。恐らくトビウオの胸鰭に近いものだと考えられる。また、飛行というよりは滑空に近く、低いところから上へ飛びあがるということはあるまい。乾燥している地域では翼が渇き、なんとも言えない不快感を催すらしい。

光輪：透明な液体でできた不定形のもの。

母親のいない家庭。少しだけ、欲しい物を買ってもらえなかった。

一見すると活発な少女で人当たりも良い。

自分の過去を嬉々として話す。

他者の自慢話を楽しそうに聞く。

彼女は例えるならば、『活発な嫉妬』だろう。

ちょっとしたいざこざから溺死させられた。そのためか顔に水がかかるのを嫌がる。

憂鬱：アスタロト （懐中時計）老衰

ワールド A-121(1)-I のうち、ワールド A-121(1)-I-JM より選出。

グレーの髪。所々黒や白の髪が混じっている。虹彩はメラニン色素が抜けているせいか濁ったグレー。

偽名として「オリヴァー・ミドル・ラスト」と名乗っていた。「オリヴァー」は英国で多い名前であり、ミドルネームは「ミドル」、ラストネームは「ラスト」としており非常に適当につけられた名前である。

自称イギリス出身。（ゲルマン系？）世界線上では英語を話す。他の言語は英語と通ずるものであれば何となくだが分かるらしい。

固有身体能力：どこからか煙を創り出し操る。操る煙には催涙性や毒性など様々な性能のものがある。遅効性か即効性かの操作もできるようだ。

翼：トビトカゲのそれとよく似ている。ただ翼を支えているのは肋骨ではなく新たに発達した別の骨のようだ。また、飛行というよりは滑空に近く、本来であれば低いところから上へ飛びあがるといことはあまりできないようだ。が、彼の固有身体能力を活用すれば風を巻き起こすことができ、かなり無理をすれば飛び上がることもできる。

光輪：煙のような不定形のもの。

娘がいて孫がいた。妻は早くに病で亡くなり、義理の息子は戦争で、娘は事故で亡くなり、唯一残った孫は薬漬けにされて殺された。

孫を殺した犯人には催眠をかけた。ほんの少し、すこし精神が不安定になる程度の催眠を。犯人は勝手に死んだ。

妻に似た、可愛い娘だった。よくできた恋人を連れてきた。すべてこれからだったのに、亡くなってしまった。せめて孫は、娘の息子だけは、幸せにと、思っていた。

過去に自分にあったことを語りたがらない。基本的に紳士的であるが、時折皮肉めいたことを言う。

ちょっとした冗談を言うこともあるが、皮肉が効き過ぎていたり単純に古すぎたりして笑ってもらえないことが大半。

距離感覚は日本人と同じくらい。墮天使たちと会う時や教会に行くときはしっかりとおしゃれをするが普段はカジュアル。

タバコ・大麻・アルコールを嗜む。左足が悪く、徴兵されることは無かった。(大麻の臭いはガラムという煙草に近いらしいから成人したら試す)

イギリス料理って不味いの？と尋ねるとにこやかに料理を作って食べさせてくる。

幾度も幾度も己で命を断とうと思ったが、そのたびに死ねず。老衰にて息を引き取った。

怠惰：アビージェティブ (自分自身)

ワールド A-139(2)-VIのうち、ワールド A-139(2)-VI-C より選出。

アルビノ グレーの虹彩を持つ。グレーとは言っても光の角度で変化し、角度によっては紫、赤など様々。普通の光だとグレーに見えるためそう表記する。

(ナスチャ・クマロヴァさんみたいなカラーリング)

偽名として「Blood red＝ブラッドレッド→ブレッド」と名乗っていた。また、アヴィは意図していなかったが「ブレッド」は以下のような意味合いを持つ。

bled((自動詞))(過去-過去分詞 bled) [出血する](#)

自称日本人。(純日本人?) ハザマ以外、世界線上では日本語を話し、英語もそれなり。他の言語は全く分からないらしい。

固有身体能力：血液型がなく、彼の血液は全ての人間に輸血できる。血流そのものを変えることはできないが、血液凝固は意図したように行えるようだ。血液産生量・速度を上げられるようだ。

翼：変形可能な液体のような翼。通常時は何とか翼のような形を保っている程度で非常に不安定。だが一時的に安定性を高めることができ、その意思さえあれば翼としての役割を果たすことができるようだ。

光輪：赤い液体でできた不定形のもの。

能力について補足

血液だまりから意図した形状に固めた血液を作ることにはできるが、上に伸ばして作ることにはできない。血液に触れていなければ固めることはできない。

他の墮天使とは異なり瞬時に相手を葬れるような権能ではない。精々「武器を作れる」くらい。相手を操れるわけでもなく相手を拘束できるわけでもない。

そのためアヴィは自分のことを「大した力のない存在」だと言う。

アルビノという特殊な生まれにより自らのことに興味を持ち、アルビノについて調べていた。その中で自分の眼の色が血の色であると知り血に深い関心を持つように。血について調べていくうちに、血をめぐる人々の思想や宗教その他に面白さを見出す。

実は「自分は皆と違って色が無い」、「白は何もない」＝「自分らしさがなにもない」と考えてしまったことが、自分でコンプレックスになってしまっている。が、あまり自覚はない。考えないようにしているのかもしれない。怪我をして血を見たときに自分にも一つだけ色がある、皆と同じものがあると気づいてから、知らず知らずのうちに血液に強い関心を抱くようになった。

自分の色を個性だと思ふことのできないうちの一人。

色素がないため目が悪く、遠くが見えづらい。太陽のもとに出ると火傷をするため、行動するのは基本的に夜。照明や光の反射すらまぶしいため、自分の教会はすべて蠟燭の火のみが光源。サングラスが嫌いなため滅多につけない。眼球振とう(眼振)があるため文字を読むのが苦手。

出血傾向がみられる。墮天使になってからは出血時に薬を投与したりはせず、天使の力で無理やり直しているようだ。「この世界じゃ僕が使ってた薬は無いみたいだし・・・色々試すよりは、無理やり直した方が安全そうだしね」とのこと。

おじいちゃんおばあちゃんと接することが多かったため、年のわりに古いネタを知っていたりする。

皮肉に非常に敏感。スラングに興味があり調べていたこともあるそう。ハザマに堕ちてからはスラングを会話の中に織り込むことが増えた。

虚飾：ワームウッド （へその緒）

ワールド A-405(1)-II のうちワールド A-405(1)-II -C より選出。

未熟児であり、人種などは不明。

固有身体能力：『嘘』を創り出す。

自分の思うままに操れる人形のようなものを作れる。

本体を覆い外見を変化させることができる。だが近いのは外見と外から見たときの動きなどだけで中身はぐちゃぐちゃ。他の堕天使や生物のエネルギー操作・身体操作などを見様見真似で行うことができる。

このどれもが本物ではなく、未熟なもの。そして本物になることは絶対に無い。

翼：不完全なもの。

光輪：不完全なもの。

未熟児であり発声ができる段階ではない。また、目も開いていなければ髪も生えていない。堕天使となってからは責任感のあるアブディエルが様子見をしている。アブディエルが親代わりだといっても間違いではない。

自我があるのかすら不明。

傲慢：アブディエル （聖書）

ワールド A-106(4)-VII のうちワールド A-106(4)-VII-FA より選出。

青い光彩（not アースアイ）を持つ。ブロンドヘア。

偽名として「（まだ考えていない）」

自称アメリカ出身。（ゲルマン系？）世界線上では英語とスペイン語を話す。

固有身体能力：光り輝く物質を操る。非常に薄く延ばしたり柔軟性を持たせたりできる。天使曰く、質量を持った光を扱っている、らしい。

軽く、速い。「押しつぶす」というよりは「切る」に近い。

翼：鳩のそのような形状の白い翼。

光輪：光り輝く物質でできている。

日本が好きな両親（海外の方）をもち、日本の孤児を救うための孤児院を開設。クリスチャンなため協会も併設していた。この孤児院でアンバーと出会い、アンバーと同時に堕ちた。

アンバーと話をしてから（つまり初対面から）アンバーと合わないと感じ嫌いに。

憤怒：マスティマ（?）

ワールド0より墜落。

青、もしくは紫色の光彩を持つ。完全な黒髪。

日本・東京に生まれた。

固有身体能力：恐らく炎を操るのだろう。燃やしたいと思った相手のみを燃やすような炎を操るようだ。

翼：

光輪：恐らく炎が輪状になったものだろう。

自分の色を個性だと思ふことのできないうちの一人。

優しい両親をもち、すくすくと育った。両親は自分たちの間に生まれた子供が、周りとう目の色のことを気にしないように、ちゃんとフォローして育てようと考えていた。

昆虫好きで口数が少ない子供に寄り添い、理解し、幸せに暮らしていた。

今もただ一人の、大切な子供の帰りを待っている。

無欲：×

世界そのものと融合。溶け込んだといってもいい。

世界の持つエネルギーが強く、融合後の無欲の意識はほぼ無い。

固有能力：大地を操る。が、執行しようという意思自体ないので、この権能が使われる日は永遠に来ないだろう。

知識欲：×（なし）

ある研究者の無生物「No.24」へ受肉。

固有身体能力：なし。感情エネルギーの変換そのものが不可能。

金属製のボディ。

○回路：完全回路系

○動力源：外部供給型→外部にて作られた電気で動く。

○身体：

○頭部：有頭型→接合型

○意思疎通：音声補助パーツ（回路繋げる）

人のコミュニティにおけるもっとも強い関係は『家族』であると推定。
管理塔完成に伴い、管理組織名を『folk』と呼称。
また、『家族』にて優位であるのは『母』もしくは『父』であると推定。
『folk』の結成に伴い、当機体の名称を『No.2 4』から『MOTHER』へと変更。
これより、管理塔は世界のあらゆる事象に対する記録活動を開始します。

「folk」とは、名詞として使用される英単語であり、一般的に「人々」や「民族」を意味する。また、特定の地域や文化に属する人々を指す場合もある。この言葉は、家族や親戚、友人などの親密な人々を指す際にも用いられることがある。

(残滓)：×

どこにあるのか、何と融合したのか、してないのか、誰も知らない。

世界の基盤とは

【旧案】

【今の案】

神の心の一部であり、神の権能を引き継いだ、神の基盤であったもの。

アンをアンたらしめていたもの。

アンがいた時代、物語の舞台となったハザマは、アンから絶え間なく漏れ出ていたエネルギーによって世界として成り立っていた。

だがアンが己を切り捨てていく毎にエネルギーの生成量が低下し、世界は不安定になっていった。

アンはアンであったから世界を一つ保てるだけのエネルギーを生成できていたのであり、切り離されたそれら一つ一つだけでは生成量が不十分なのである。

そのため、現在のハザマは何とか形を保ってはいるものの大半が闇へ呑まれている。

—名称—

「意識」らには各々特徴があり、それに適した名前をアンによって付けられている。なぜキリスト教における罪を名にしたのかという理由はアンと友との会話が原因。(これらを持っていない人間はいないんだよって言う会話)

異形とは

人間以外の動物の要素が外見的特徴にあらわれている生物。

心優しい者や家族思いな者が多い。

一度に複数の子供・卵を産む。

無生物とは

定義：意思疎通が可能か、随意運動を行うか。

初めは一人のエンジニアが造ったロボにもなれない未完成品。様々な人間が造り始め、やがて無生物たちが無生物を作るようにもなった。

○回路：完全回路系・解放回路系

○動力源：電気（自家発電・外部供給）

- ・自家発電型：最も多いタイプ。摂取型と非摂取型がある。

摂取型例） ガソリン・石炭・ゴミ・石油・木 etc.

『燃えるもの』なら食べるが好き嫌いは個体差。体質的に合わないものもある。

非摂取型例） 太陽光・風・水・原子 etc.

- ・外部供給型：外部にて作られた電気で動く。

《例外》

- ・完全蓄電型：生まれ持った電気量で動く。

どの型であったとしてもこれらへの型変更は可能。

- ・自家発電型になるには：ボイラーやタービン等必要なものを取り付ける必要がある。

- ・外部供給型になるには：回路の変更、配線結合用アダプタなどが必要。

- ・完全蓄電型になるには：エネルギーを含む何らかの物質からエネルギーを供給するための構造や回路などが必要。型変更が一番大変で危険。

○身体：多様。動力源とある程度対応。その都度書いていく。

整形可能なパーツと不可能なパーツがある。完全回路系なら回路が対応すればパーツ変更などが可能。解放回路系は電気伝達率などが関係。

○頭部

頭部無しタイプと頭部有りタイプが存在。

- ・有頭型：浮遊型、半接合型、接合型
- ・無頭型

目など周りの環境についての情報を収集する方法はさまざまで、有頭型の場合はたいてい頭部にカメラやセンサーがついている。

無頭型の場合は体のどこかにカメラやセンサーがついている。

○死

思考を司る部位の破損。

思考を司る部位を複数持つものや、回路すべてが思考に用いられているものもある。

無生物はエネルギーが無くなると活動を停止する。この状態を仮死と呼ぶ。

回路が生きていて、かつ適合可能なエネルギーが再び流れれば活動可能になる。

○生殖

ない。

○法律

手続きをおこない、認められれば人権を手に入れることができ、人として生活できる。

人の法に則って裁かれる。

○意思疎通：周波・発音 etc.

共用語は人語。

音声で話すものは音声変換器（音を拾って勝手に変換）と音声補助パーツ（回路繋げる）がある。

音声変換器の方が安価だが、持ち歩く必要が無いという利点から音声補助パーツを使う無生物も多い。

音声補助パーツにも抑揚をつけて話せるものと話せないものなど様々な違いがあり、ピンからキリまでいろいろである。

擬人昆虫

擬人昆虫にも種類があり、ざっくり分けて人を食うか否かである。

共通しているのは各自様々な方法で人に化けているということ。

美しい外見のことが多いが、外見に反して知能が異常に低いことも多く、大抵は人の手により処理されてしまう。

○食人昆虫 《artificial bait》（疑似餌）

例としてマのような擬人皮をかぶる類が含まれる。

大型昆虫が多い。

○非食人昆虫 《inborn》（通常生まれた時に存在しているさま。）

例としてメマトイのような外骨格自体が人に近いものが含まれる。

小型昆虫が多い。

○法律

擬人昆虫で人権を持っているものは一人もいない。おそらく食人昆虫と非食人昆虫の見分け方が確立されていないため、何か問題が起きたときにすぐに対応できるようにだろう。

人権を持っていないため人の法は適用されない。

その他

神についての見解

神は創世ののちに己の心を12に分けた。

神はそのうちの11を世界を支える基とした。

そして神は愛する私たち人間の忠誠を試すため「天使」を創造された。

（誤りである。神にとって人は観察対象であった。好きな人間も嫌いな人間もいるけどできる限り平等に接しようとしている。が、出来ていない時もある。そも、神などいない。ただの意識。）

噂

いつの間に、何かがきっかけで生まれた話。嘘と真実が入り混じるその物語を人は「噂」と呼び、時には嫌悪し時には享受する。

天使を殺すと災いが起きる：Black Rabbitの世界を暗示している。Yellow Rabbitでは天使を殺さないため世界は平和。

神は言葉遊びが好き：そのまんま。

西暦

2000年といった枠組みは存在しない。

四季こそあるが、その日その日が何月何日なのかといった認識は特定の街でのみ存在している。またその認識も私たちの世界のそれとはまったく異なる。

戸籍と人権

戸籍と人権は独立して存在している。

・戸籍

戸籍登録が行われていない場合でも、名前や住まいなどがすでに管理塔に知られている可能性がある。

戸籍は管理塔で手続きをおこなえばすぐに得ることができる。

この時の手続きで聞かれることは、管理塔がどの程度情報を得ているかによって変化する。が、根掘り葉掘り聞かれることは管理塔が一切の情報を持っていない場合にしか起こらず、非常にまれ。(本作で一切の情報がないのは宇佐のみ)

・人権

この世界における人権とは生来持っているものではない。管理塔へ戸籍登録を行った際に与えられるか否かが決まる。

ただ一つだけいえることは「人権保有者、『人』を殺害したものは『人』ではない」ということである。

人権の有無を基準とした法律の街が多い。

真名とは

精神の記憶に刻まれる、無意識下でも反応してしまうほどの本当の名。

Q：なぜ人は名をつけるのか。

A：人は己が他と違うという線引きを欲しがる。そのために名を持つ。

精神

生命の「生きる」ということの根底に存在するもの。

「意思」「思考」とも。アンは物を知覚し、考え、求めるものを「意識」と呼んだ。

「記憶」を含有する。

『ワールド』で死んだものたちの精神は形を持ち、時間の経過とともに記憶ごと分解(変換)されて純粋なエネルギーになる。このエネルギーによりワールド間の「区切り」が保たれて

おり、数多の世界線を維持することを可能にしている。

「ハザマ」で死んだものたちの「精神」はすぐに分解されハザマを維持するエネルギーになる。

「精神」は EE を創り出し EEPM に変換して貯蓄する役割を担っている。ワールド 0 に近いワールドの生命の場合、ワールド 0 から遠いワールドの生命よりも精神が強く、EEPM を多く貯蓄できる。そのため MS を発生させることはほぼ無い。

より精神の強いものの方が扱える EE が多いため、固有身体能力または道具が使える場合には、より精神の強いものの方がそうでないものよりも強力な固有身体能力または道具の能力を引き出せる可能性がある。

が、EE、EEPM は固有身体能力、道具を持たないものには何の意味もない。

墜落者

元の世界で死んで堕ちて来たものと、生きたまま堕ちてきたものがある。

生きたまま堕ちて来たものは少ない。

《元の世界で死んで堕ちて来たものの肉体はどうなっているか》

『精神』の記憶が物質を並べ、肉体を創り出している。

肉体を作る際特殊なエネルギーを大量に必要とするため、「ワールド」内で受肉することはほぼありえない。この必要なエネルギーで満たされたハザマのような特殊な空間では可能。

そのため、元の世界で死んで堕ちて来たものたちの肉体はハザマに堕ちてから形成されていく。肉体生成の際、自らの死因の記憶を参照して生成される場合がある。肉体生成の後「精神」が入り込むが、受肉した彼らが死亡時の記憶を引き継いでいない、もしくは記憶の一部を欠損していることがある。

《元の世界で死んで堕ちて来たものと生きたまま堕ちて来たもの》

・生きたまま堕ちて来たものは元のワールドでの時間に合わせて老化する。死んだものはハザマの時間に合わせて老化する。

・固有身体能力の逸脱性。別のワールドから堕ちてきたものはハザマで生まれた生命よりも法則から逸脱した能力を持つことが多い。ハザマで生まれた子は、親が墜落者かどうかにかかわらず法則にしたがった能力を持つことが多い。

管理塔 概要

モチーフ：バベルの塔

天へ至らんとする、神への反逆の塔。

各街に一つずつ小さな塔があり、中枢街に最も大きな塔がある。「街」の人々の戸籍を管理し各街の文化・歴史を後世のために保存している。

行政は全く行っていないが最も重要な所とされている。

街の機密などすべての情報が保存されており、アクセス権限 A、B、C、D、E の全 5 段階で記録が保存されている。各アクセス段階ごとに独自の暗号で記録がされており『folk』各員はアクセス権限に応じた暗号の解読法を伝えられている。

アクセス権限 A は『管理者：MOTHER』以外による解読は不可能。

噂として、「愛し子」は BCDE のアクセス権限を保有しているという話がある。

建てたのは誰か：神を崇拝する人々。尊敬しているからこそ神に近づきたかっただけ。（＝高慢 神の見る世界を知りたい者も。神になりたいともとれる）

今運営するのは誰か：不在。神の席＝『すべてを知った者』は未だ空席。「管理者」は別に存在。

すべての情報を得んとする理由：各々が各々の意思で情報を得る。すべてを知る→神を知る 情報を共有するための「塔」

かつてのアブディエルが無理やり情報を得ようとするも「管理者」に認められず追い返される。以降アブディエルと「管理塔」は敵対関係に。（他の墮天使とのかかわりは「塔」としてはない。「観察者」が墮天使と接触したことは多々ある。）

各街から多くの援助を受けており、「人権」の審査・「人権証明書」の発行、裁判用の情報提供、MS 情報収集などを行っている。

電車 概要

囚人送出線と越境線、街内線（がないせん）がある。

街内線以外は全て地下鉄。

囚人送出線：深夜走行・2～3車両・特別車両。

ブレイクタウン監獄前経由（「街」の中では地下街のみ停車）

各街の一時収監所からさまざまな方法で駅まで輸送され、そこから電車でブレイクタウンの監獄へ。

各街から直通でブレイクタウンへ向かう。

電車自体は一つしかないためこれを街の数だけ繰り返す。

囚人送出線は一時収監所に囚人がいるときのみ走行。

越境線： 昼間走行・10車両×2・普通車両。

ブレイクタウンには止まらず他の街に停車。（「街」では地下街のみ停車）

電車は二つしかないためどの時間でも各駅停車。

街の間での人の移動は比較的少ない。

—特別走行日—

ブレイクタウン経由で各駅停車走行する日。月初めの一日のみ始発から終電まですべてブレイクタウン経由。

街内線（がないせん） 内回りと外回りがある。

感情・空間エネルギーなど

感情エネルギー保存物質（emotion energy preservation material）（EEPM）

ATPのようにエネルギーを保存している物質。ATPと同様に、構造から特定の分子が分離することでエネルギーを放出する。

この物質は脳のどこかで生成されているようだが、脳のどこでどのように生成されているのかは不明。

覚醒状態だけではなく、就眠時などでも生成・消費がわずかにではあるが行われている。

感情の高ぶりに呼応するかのように生成量・消費量は増加することが確認されている。

感情エネルギー（emotion energy）（EEもしくはE2）

EEPMに保存されているエネルギー。

固有身体能力を活用する際、『道具』を活用する際に消費される。

その個体の体外に常に漏れ出している。計測すると個体によって放出量の変化に差があるようだ。放出量の「波」が異なると言い換えてもいい。

固有身体能力

生物、各個体が持つ身体能力。

活用の際、EPPM の生成量・消費量が増加する。

固有身体能力を活用する際に脳が活性化していることが関係しているのだろう。

脳が活性化しているから固有身体能力を活用できるのか、固有身体能力を活用したから脳が活性化しているのかかは不明。

『道具』と感情エネルギー

『道具』は電化製品のように、エネルギーを変換することで本来の性能を発揮する。

使用者の体外に流れる EE を消費して『道具』は動作する。

使用者によって『道具』の性能に差が出るのは、個体によって EE の「波」が異なるためだろう。『道具』には『道具』に合う「波」があり、その相性が良ければ良いほど『道具』の性能が発揮されるのだ。

また、『道具』は使えば使うほど体になじみ、出力が上がるという報告がある。

空間

数多の「要素」で形成されている、という考えがある。「空間形成理論」という理論であり、多くの生物に信じられている理論である。

空間情様エネルギー（space emotional energy）（SEE もしくは SE2）

空間形成理論において提唱されているエネルギー。以下、「空間形成理論」文書より抜粋。

空間情様エネルギーは空間を形成する「要素」を結び付けているエネルギーである。

生物は空間を形成する「要素」であり、無意識のうちにこのエネルギーを受容し消費している。このエネルギーを消費することで、生物という「要素」は存在していただけるのだ。

つまりすべての生物は生物としてある限り SEE を消費している、することができるということである。

SEE は計り知れぬほどの膨大なエネルギーであり、本来であれば生物の、ましてや一個体の消費程度で空間が影響を受けることは無い。

だが複数個体、もしくは多くの SEE 消費を行う個体、においては異なる場合がある。

その区画において SEE が一定量以上消費された場合、「要素」の不安定化、空間の異常化が起こる。

MS、I がそれにあたる。

特に MS においては「核」となった個体が多く SEE を消費することで、新たな空間を形成しているということになる。

MS、I ともに形成の際には、個体が消費した SEE と個体が持つ EE が用いられている。

核となった個体の記憶、心理に影響を受けて MS 内部の空間構成が変化しているのは、その個体を通してエネルギーが使われているからであろう。

また、空間が生物の記憶、心理を受けて変化していることは「空間が生物に『共鳴』することで起こる」とも言われる。

だがこれらの説の科学的な証明は未だなされていない。

心象風景（Mental Sceneey）（MS）

ドーム状・箱型・球体など様々な形の膜のようなもので覆われている。

入るのは簡単だが出るのは不可能。だが稀に出口が作られている場合もある。

「核」を破壊することで出ることができる。

深層と表層がある。

深層は無秩序 不規則 不安定

表層は秩序 規則性

核

「MS、I ともに形成の際には、個体が消費した SEE と個体が持つ EE が用いられている。

核となった個体の記憶、心理に影響を受けて MS 内部の空間構成が変化しているのは、その個体を通してエネルギーが使われているからであろう。」（「空間形成論」より）

「核」は MS 形成の際にエネルギーを扱う生物、個体。

MS 形成の際に消費する SEE は、本来「要素」として存在するために無意識に個体が消費している SEE 量と比較にならないほどに多い。

本来のキャパを大きく超える SEE を扱う、その影響を受けて個体の変質し「核」となる。

多量の SEE を扱えるように肉体が変化し「回路」「道」のようなものが形成される。空間へ繋がる「道」と固有身体能力へ繋がる「回路」が強化される。

「核」が SEE を消費し形成し続けることでその空間は形を保つ。

MS で発生する『道具』

「核」となった人物の一部（血や肉片）が吸収されることでその回路が組み込まれ「完成」

する。

核となった人物とより共通している人物が使うと威力が高まる。

「核」の質によって威力の上限が変化する。核が複数存在する場合は複数の核たちの回路の組み合わせによって機能が変わる。

組み合わせが悪いと回路として成り立たず、道具は「完成」しない。もしも完成した場合には複数の機能を持つ道具になったり、少しの EE でより優れた機能を発揮する道具になったりする。だが回路が複雑になった代わりに相性のいい EE の「波」も複雑で、完全に道具の機能を引き出せる生物もそういないだろう。

相互作用（Interaction）（I）

膜はない。核もない。

その空間に積もった EE が影響し SEE の流れが変化、空間異常を引き起こす。

I で発生する『道具』

一定の段階以上の I で発生し「完成」する。

他の MS や I の影響を受けて少しずつ少しずつ成長する。

成長の上限は今のところ確認されていないが、ちゃんと「道具」として「完成」するまで使い続けるような使用者は少ないため、MS の「道具」より威力が低いものが大半。

はじめは弱く脆い回路だが、少しずつ慣らししていくことで鍛えられて強固になる。

使用者の「波」の影響を受けて徐々に使用者の特性を取り込んでいく。I の「道具」を代々受け継いでいくと、より強くより複雑な機能を持った道具になるだろう。

人工核

I で発生した道具に合成することで人工的に MS の道具と同じようなものができる。

人工核は MS で核となった人物の心臓や脳を適切に処置することで作ることができる。

人工核を作るには、MS の「道具」よりも多くの血肉を用意する必要があるため危険を伴う。

だが人工核には意図的に優れた、作りたい形の「道具」を作れるというメリットがある。

また、保存状態によるが「核」の亡骸から人工核を作ることでもある。

本来なら人工核を造る際、核の血肉を回収する必要があるため危険を伴うが、作製する者とは別に回収する者がおり、そういった職業のものにやらせると作製者の危険は下がる。

さらに。人工核によって発生した MS は核となった人物の心臓や脳の記憶をもとに形成される。